

頼山陽の「日本外史」をめぐるて(一)

土屋博

頼山陽(一七八〇年生れ、一八三二年歿)の日本外史、日本政記、日本樂府、更に山陽詩集、山陽遺稿をはじめとする諸著作の數々、終戦前迄は永らく多くの愛讀者を獲得しつるも、戦後以降、世の中一變し、人々に忘れ去らるること久し。

小生、終活の時期を迎へ、思ひ立ちて、これまで永年に亘り蒐集せる頼山陽の日本外史關聯書籍一覽を以下に纏めて記録に留め置くこととせむ。蒐集は小生のライフワークの一端に過ぎざれど、若し後學の者にとり多少なりとも参考になる點若し有りせば、幸甚と存ずる次第。

日本外史二十二卷は安藝の人頼山陽先生の著にして、武門の歴史、政權の爭奪史也。本書の勤王の精神を鼓吹したるは何人も之を認むる所なり。木戸孝允かつて曰く、「維新の際國事に命をおとし天下の士氣を鼓舞せしもの多し。而れども山陽の著せし功には如かざるなり。」と。敘述の方法は、代表的武門を取り、第一卷平氏、第二、三卷源氏、第四卷北條氏、第五卷楠氏、第六卷新田氏、第七、八、九卷足利氏、第十卷後北條氏、第十一卷武田氏、第十二卷毛利氏、第十三、四卷織田氏、第十五、六、七卷豊臣氏、第十八より二十二卷まで徳川氏なり。

(日本外史を讀む爲の字引類)

一「日本外史字引 全」三重縣貫屬土族野呂公敏編輯

(東京府貫屬土族島次三郎藏版、明治六年夏八月新鑄、三十六丁)

例言に曰く、「近頃家童讀外史。爲抄出數字。參考諸書施傍訓」と。

日本外史中の漢字を畫數順に列擧す。一畫の一、乙、二畫の人、入、又、力、ニ、乃、了、丁、刀、八、七、十、九より、二十七畫の驥(をどりあがる)、驩(よろこぶ)、二十八畫の蠶(かいこ)まで。

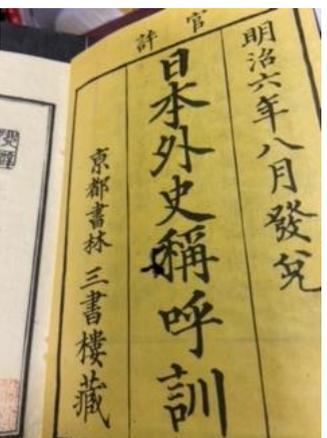
明治六年八月の新鑄(セン、彫り直し)なれば、絲の解れこそあれ、本の状態、ね良好なり。これまで類書は數多蒐集しつれど、和紙の白き包装紙附きものは滅多に無ければ、古書蒐集家としては嬉し。

二「日本外史稱呼訓 乾坤」松山富美輯

(京都書林三書樓藏版、明治六年八月發兌、合計三七丁)

前掲書同様和紙の包装紙附きにて、状態頗る良好なり。

凡例に曰く、「童蒙讀日本外史者、若地名人名稱呼、難讀者不尠矣」と。平氏記の三善清行（ミヨシキョツラ、参議宮内卿）より徳川氏記の興子（オキコ、明正天皇）まで。本書を豫め通讀せば、日本外史の素讀、獨習にても極めて容易となるらむ。但し、キョツラに關しては、キョヤスなる讀み方も三善家に根據ありて有力なれば、本書の利用に關しては一應の注意を心掛くべし。



三「音訓便蒙 日本外史字類 上下」笹島彰訓譯

（甲府書院内藤傳右衛門藏版、明治八年刊、六三十六四丁）

訓譯人は、茨城県水戸下町七間町二十番地の笹島彰。卷首書牘の箇所を例にとらば、當路は政をとる人、勇退高蹈は思ひ切り免職すること。

四「外史字引」齋藤實穎編纂

（東京書肆中外堂發兌、明治九年刊、一二〇丁）

古書價格五百圓也。兒童教育の始めは和漢の文字を識り國史に通ずるにあるとし日本外史に登場する漢字を畫數順に並べ、讀み方、意味、熟語等を示す勞作なり。この一冊を徹底的に頭に叩き込まば、文語學習の又と無き基礎とこそなるらめ。畫數多き漢字の例を擧ぐれば、以下の如し。

麤（そ） あらし、おろそか、おほひなり

麤（さん） かまど、かしぐ

五「日本外史字引」安倍爲任著

(潤屋堂、明治十年十月出版、四二丁)
編輯並出版人は東京府平民安倍爲任。和綴。縦十一、九糎、横八、五糎の袖珍サイズ。
古書價格五百圓也。

六「日本外史字引」松山喜輔編輯

(三書堂藏版、明治十年版權免許、四一丁)
袖珍サイズ。

七「日本外史譯語 全三冊」西野古海編輯

(東京書林文江堂梓、明治十一年發兌、八〇十九〇十九二丁)
古書價格千五百圓也。西野古海は、古本まつりの收穫品「和漢日用作文捷徑」(東京文江堂、明治八年發兌)の著者なり。

八「外史譯語 上下」大森惟中・莊原和同纂

(東京書林、明治十一年三刻、上卷一〇六丁、下卷一〇七丁)
古書價格五百圓也。初刻は明治七年。

日本外史を讀む爲の漢字の參考書。上卷は十畫までの漢字を収録す。序に曰く、「今日我邦兒童教養の始めは和漢の字を識り國史に通ずるに在り。山陽先生の日本外史獨り煩簡當を得たりと爲す」と。十畫の例より。冢、ちよう。冢子はあとつぎ。滾、こん。滾龍はこんりよう、天子の御衣。畚、ほん。もつこ(土を盛り運搬する具)。虓、かう。虎の様に強い。荐、しきりに。殷、さかん。悚、しよう。おそれる。倅、こひねがふ。拵、とる。紵、ゆるむ。蓋し現代人にとりてかかる字を識る機會乏し。

(明治七年版の初版も所有)
(更に上巻については明治十年四月再刻版も所有)

九「日本外史字引大全 全四冊」大阪府平民岩井眞二郎編輯

(三書堂藏、明治十二年刊、八〇七九九五四十七五丁)
古書價格二千圓也。小生、此れまで一、二卷のみ端本にて所有せし處、今回は全四卷揃ひにて状態も極めて良し。「字引」の名稱なれど、畫數別の漢字字典にはあらで、日本外史の文章の順による字句解説集なり。緒言に曰く、「此書は本書中の熟字を摘抄して順次に國訓俗譯を施し聊か先輩の義解を引用して其の下に注す」と。

十「鼈頭挿畫 日本外史字類大全 中、下」河村與一郎纂輯

これも刊行年代は不明なるも明治初期と推定せらる。
和綴。縦十一、九糎、横八、五糎の袖珍サイズ、豆本に近し。



十一「改正刪補 日本外史字類大全 一」河村與一郎纂輯
(明治十七年再販、五一丁)

サイズこそ異なれ、内容的に前記中下巻と併せ全巻揃ひとなる。

十二「鼈頭 日本外史獨學大全 二、三、四」太田成之編輯

(編輯人愛智縣士族太田成之、出版人東京府平民山中喜太郎、明治十六年刊、七二四—
一八〇丁)

第一巻欠け。

十三「首書圖彙 日本外史字解大全 下」大岡謙編輯

(編輯人大坂府平民大岡謙、出版人大坂府平民中川勘助、明治十六年刻成發兌、六四丁)
上巻欠け。

十四「鼈頭挿畫 日本外史字解大全 上中下」渡邊資次郎編輯

(東京東崖堂、明治十七年御届、十八年刊六四—四九—四二丁)

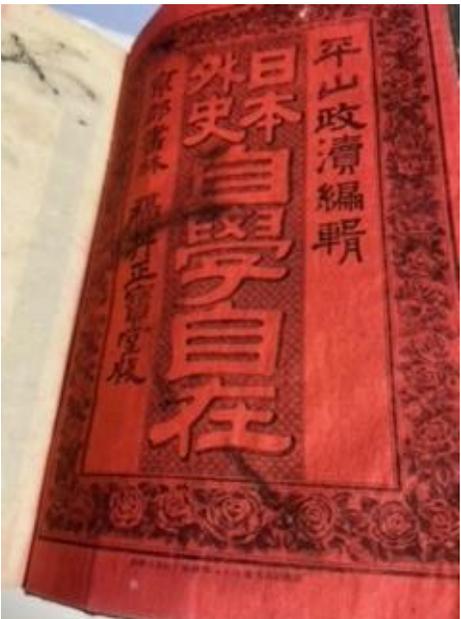
十五「日本外史便蒙 一、八」長瀬寛二編輯

(編輯人岐阜縣平民長瀬寛二、出版人同縣平民三浦源助、明治十八年刊)

十六「日本外史自學自在」平山政瀆編輯

(京都書林福井正寶堂、明治十八年刊)

和綴、四分冊を合本したるものなり。古書價格三百圓也。例言に曰く、「此編素より雞肋の著たりと雖も近來頼氏の外史盛んに行はれ戸ごとに誦し人ごとに讀まざるもの無し。隨て註釋字類の書も将さに汗牛充棟に至らんとするも概ね大同小異隔靴の歎なき能はず。」と。



十七「改正刪補 日本外史字類大全 附圖」

刊行年代は不明なるも明治初期と推定せらる。

和綴製本は立派と覺ゆ。上古京都圖、應仁亂後京師中外荒殘圖より徳川天草五亂圖、豊臣朝鮮國圖まで、全四十六頁。木版地圖印刷技術の高度なること、驚嘆に價す。

十八「増補日本外史稱呼訓 卷下」生駒貞幹輯

(京都市文堂、四〇丁)

和綴。刊行年代不明。

十九「日本外史譯解 壹」小川和藏譯解

(浪華書肆七書堂、八四丁)

和綴、刊行年代不明。

二十「日本外史纂語字解 全四冊」鈴木音彦編纂

(三書堂藏版、明治二十二年刊、五三丁+五三丁+五九丁+四九丁)

古書價格二千五百圓也。本書の類書に比しての特色は、凡例にもある如く、「註釋は勉めて俗言卑語を用ひたり。蓋し童蒙をして解得し易からしめんことを欲してなり」との點にあり。

(明治二十五年再販も所有)

二十一「頭書圖彙 日本外史獨學講義 全四冊」鹽見文準編輯

(發行兼印刷人大草常章、明治二十五年刊、八一+一九〇+七六+六四頁)

凡例に曰く、「本書は僻遠の地に在つて日本外史を學習せんとし良師に乏しきを憾とする者の爲に獨修の便を計り平易簡單にして意義の明解し易き様著述せしものにして他の字解類に比して自ら其體裁を異にせり。」と。

二十二「日本外史字類講義」(全三冊)

(明治堂、明治三十年刊)

古書價格五百圓也。和綴。例言より、「此書は邊陲師に乏き子弟の日本外史を修學せんとする者の爲に編輯したるを以て將來有爲の少年に於ては座右に缺くべからざるものなり」と。

二十三「日本外史字典」郁文舎編輯所編纂

(東京郁文舎、明治三十九年刊、一六八頁)

古書價格八百圓也。凡例より、「今や縮刷日本外史の發行に際す。焉ぞこれが新字典なかるべけんや」と。

二十四「日本外史字解」文學士久保天隨著

(博文館藏版、明治四十一年刊、定價金貳拾五錢、一七二頁)

「日本外史新釋」十二冊のうち、字解部分のみを抜き出して印刷したるもの。本書を机上に備へて參考にせば、破竹の勢にて外史一冊を讀了すること可能なる由。

(大正二年十二版のものも併せ所有。)

二十五「改正刪補 日本外史字類大全」河村與一郎纂輯

(積善館藏、明治四十四年活版廿版)

古書價格四百圓也。初版は明治十年。千八百餘箇條を増補。たとへば、「樂翁」につきては、「天明寛政の間老中上首となり賢明の譽あり、樂翁は退老の後の名」とあり。

二十六「日本外史字解」山中肅編

(大阪彰文館、明治四十五年刊、九六頁)

古書價格千五百圓也。凡例に曰く、「外史註釋の如き、初學の爲に資する者、汗牛充棟も啻ならずと雖も、繁に失せずんば簡、魯魚焉馬の誤なくんば杜撰、孟浪の譏を免れず。」と。外史氏については「正史は史官の作る所、外史は一家の私史を言ふ。史氏は史家の意味」と。本書は類書に比して薄き點に特色あり。

二十七「日本外史字句詳解」小宮水心著

(大阪立川文明堂、大正十四年十五版、定價金五拾錢、二七五頁)

本書は小宮氏の曩に著したる「註解日本外史」に對する字句詳解なり。

二十八「詳解 日本外史字典 附諸家系譜」奥村恒次郎著
(文友堂、昭和三年八版、定價金五拾錢、二二一頁)

古書價格三百圓也。凡例に曰く、「日本外史は頼氏が畢生の大著述にして常に日本歴史として趣味ある好讀物たるのみならず、その記事の清明にして勁遒けいしゆうなる、その史論の警拔にして痛快なる、之れを讀む者の精神に多大の感化を與ふべく、これを一種の國民教科書としても亦大に價值あるものたるを信ずる也」と。

(令和三年十一月九日受附)